

アルティメット選手の心理的競技能力について

第一報

瀧澤寛路¹⁾・村本名史¹⁾・栗田泰成²⁾・高根信吾¹⁾・笹川 慶³⁾

On Psychological Competitive Ability of Ultimate Players

The First Report

Hiromitsu TAKIZAWA Akihumi MURAMOTO Yasunari KURITA
Shingo TAKANE Kei SASAKAWA

要 旨

本研究の目的は、アルティメット選手に心理的競技能力診断検査 Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes.3 を実施し、心理的競技能力を明らかにする共に、アルティメットにおける競技能力向上の為の基礎的資料を作成することである。

アルティメット選手における心理的競技能力診断検査の総合得点の平均値は、男子が 184.06、女子が 177.85 というものであった。女子選手に比べて、男子選手は心理的競技能力が高いことが伺える。

5 因子の中でも精神の安定・集中、自信、作戦能力において、男子が女子に比べ有意に高いことが明らかになった。一方、協調性においては、女子が男子に比べ有意に高いことも明らかになった。

さらに、12 尺度においても、有意な性差がみられたが、自己コントロール能力・自信・決断力・判断力の 4 尺度については、男子が女子に比べ、有意に高い値を示した。従って、男子は女子に比べ、緊張を強いられる場面であっても、安定したパフォーマンスを発揮し、ゲームを的確にコントロール出来ることが推測される。また一方、協調性についても顕著な差が認められ、女子が男子に比べ、有意に高い値を示した。このことから、女子選手は、男子選手に比べ、協力的で、相互に尊重し合うことが推測される。

Abstract

The purpose of this study is to examine the psychological competitive ability of the Ultimate players as an approach to basic data for improvement of competitive ability. The average total score of the male players examined by Diagnostic Inventory for Psychological Competitive Ability 3, in short, DIPCA.3, was 184.06 while that of the female players was 177.85. It suggests that the psychological competitive ability of male players is higher than female players. In the comparison of their scores in the "five factors," it is evident that male players are superior to female players in mental stability, confidence, and strategic ability and that the female players are superior in cooperation. The examination on the "twelve scales" also shows a significant difference between the sexes. Male players were significantly higher than female players in the scales of self-control, confidence, decision and judgment, which indicate that male players can cope with pressure better than female players and exhibit more stable performance in tight games. On the other hand, the female players were significantly higher than the male players in the scale of cooperation, which shows female players remarkably superiority to male players in cooperation. Female players respect each other.

¹⁾ 常葉大学経営学部経営学科 ²⁾ 常葉大学健康科学部静岡理学療法学科 ³⁾ 日本福祉大学経済学部

はじめに

アルティメット^{注1)}は、『1 チーム7名からなる2 チームが、100m × 37m のコート内でフライングディスク^{注2)}をパスにより運び、相手エンドゾーン（ゴール）内で味方からのパスをキャッチすれば、ポイント（1点）となるディスク版のアメリカンフットボール。スピードや持久力、ディスクのスロー技術、チーム戦術等、フライングディスクのあらゆる要素が集約されることから、ULTIMATE（究極）と呼ばれる。』¹⁾

近年、我国におけるアルティメットチームも大学生を中心に増加の傾向にあり、今年度（平成26年度）、日本アルティメット協会にチーム登録しているのは、性別・年齢不問のオープン部門に、大学生66、社会人43、女子のみのウィメン部門に、各々52、21、男女混合のミックス部門には社会人のみ11、性別不問の満33歳以上のオープンマスター部門に6、女子のみ満30歳以上のウィメンマスター部門に2、さらに、性別不問・小中高生を対象としたユース部門に10、実に合計すると211チームである。

さらに、アルティメットの日本代表チームは、諸外国には体格差では劣るというハンディキャップを、スピードとスロー技術、チーム戦術等で補い、国際大会において、現在までに数々の好成績を挙げている^{注3)}。すなわち、我国は、世界でも有数のアルティメット強国と云えよう。

その一方で、アルティメットは、一般には、その認知度は未だ乏しく、ニュースポーツ、マイナースポーツと言われて久しい。現行では、アルティメットは発展・普及の途上にある。しかしながら、ラグビーやサッカーにも決して引けを取らない激しさと高い競技性を持ち合わせているスポーツである。

従って、プレーヤーの体力、技術、チーム戦術のみならず、当然、メンタルコントロールも重要なスキルになる。しかしながら、アルティメット選手を対象としたメンタル面への科学的なアプローチはほとんど見当たらないのが現状である。

そこで、本研究はアルティメット選手を対象として、徳永らが開発した「心理的競技能力診断検査(Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes. 3)」を実施し、アルティメット選手の心理的競技能力を性差に着目して明らかにする共に、アルティメットにおける競技能力向上の為の基礎的資料を作成することを目的とする。

方 法

対象者

2013年7月13、14日静岡県富士市富士川緑地公園で開催された、第4回全日本社会人アルティメット選手権大会に出場した社会人選手男子42名、女子36名、同年7月22～28日カナダ・トロントで開催された23歳以下世界大会（男子・女子・ミックスの3部門）に出場した日本代表男子37名、女子31名、さらに、同年7月25～8月4日、コロンビア・カリで開催されたワールドゲームス日本代表（ミックス部門のみ）男子8名、女子7名、以上男子87名、女子74名、合計161名である。

対象者の年齢

男子：25.78 ± 15.22（19～41）歳
女子：23.91 ± 10.81（19～35）歳

検査期日

2013年7月

検査方法

徳永らが開発した心理的競技能力診断検査 Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes.3（以下DIPCA.3と略す）を実施した。

DIPCA.3は、スポーツ選手が、パフォーマンスを発揮するために必要な心理的競技能力を診断するものである。

心理的競技能力を、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子と規定し、さらに、各因子は、忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲、自己コントロール能力、リラックス能力、集中力、自信、決断力、予測力、判断力、協調性の12尺度から構成されている。（表1.）

表1. DIPCA.3における心理的競技能力の因子および尺度

5 因子	12 尺度
競 技 意 欲	忍耐力・闘争心・自己実現意欲・勝利意欲
精神の安定・集中	自己コントロール能力・リラックス能力・集中力
自 信	自信・決断力
作 戦 能 力	予測力・判断力
協 調 性	協調性

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」

p. 8（株）トーヨーフィジカル出版部 2009

また、12尺度の具体的な内容は表2.の通りである。

検査は、48の質問項目、並びに、回答の信頼性を判定する4項目(Lie Scale)、合計52の質問構成となっている。

各質問に対する解答は、全て1.ほとんどそうでない(0~10%) 2.ときたまそうである(25%) 3.ときどきそうである(50%) 4.しばしばそうである(70%) 5.いつもそうである(90~100%)の5段階に分けられており、被験者は最も自分に当てはまる番号を選ぶというものである。番号はそのまま得点となり、12の尺度が各20点満点となっており、総合得点は240点満点となる。

尚、Lie Scale(20点満点)が、12点以下であれば、信頼性が乏しいと判断し、診断を回避する。

分析方法

DIPCA.3の採点、得点判定、プロフィールの作成は、徳永²⁾の手引書に従って行った。先ず、5つの因子において各得点の平均値と標準偏差を男女別に求め、平均差をウエルチのt検定を用いて分析した。次に12の尺度においても各得点の平均値と標準偏差を男女別に求め、平均差を同様にウエルチのt検定を用いて分析した。統計的有意水準は、 $p < 0.05$ とした。

結果並びに考察

今回のアルティメット選手における心理的競技能力診断検査の総合得点の平均値は、男子が184.06、女子が177.85であった。DIPCA.3を開発した徳永³⁾が示唆するように、総合得点の平均値は、男子が女子を上回るものとなった。今回のアルティメット選手における総合得点の性差は先行研究と一致し、女子選手に比べて、男子選手は心理的競技能力が高いことが伺える。

さらに、表3.は、心理的競技能力における総合得点の判定表である。今回のアルティメット選手は男女共に、4(やや優れている)に近い値を示しているものの、3(もうすこし)の判定であった。

因みに、村上ら⁴⁾が行ったアテネオリンピック出場選手(種目は明らかにされていない)の総合得点の平均値は、男子が190.40、女子が181.96であった。

また、立谷ら⁵⁾が行ったソルトレークシティー及びトリノ冬季オリンピック出場選手(種目は明らかにされていない)の総合得点の平均値は、ソルトレークシティーの男子が、186.9、女子が171.3、トリノの男子が177.3、女子が171.2というものであった。従って、本研究の総合得点における性差は先行研究と一致し、その得点から見て、今回のアルティメット選手の心理的競技能力は冬季オリンピック出場選手に比べても決して低くはないと云えよう。

表2. 12尺度の具体的な内容

1. 忍耐力	がまん強さ、ねばり強さ、苦痛に耐える。
2. 闘争心	大試合や大事な試合での闘志やファイト、燃える。
3. 自己実現意欲	可能性への挑戦、主体性、自主性。
4. 勝利意欲	勝ちたい気持ち、勝利重視、負けず嫌い。
5. 自己コントロール能力	自己管理、いつものプレイ、身体的緊張のないこと、気持ちの切りかえ。
6. リラックス能力	不安、プレッシャー、緊張のない精神的なリラックス。
7. 集中力	落ち着き、冷静さ、注意の集中。
8. 自信	能力・実力発揮・目標達成への自信。
9. 決断力	思いきり、すばやい決断、失敗を恐れない決断。
10. 予測力	作戦の的中、作戦の切りかえ、勝つための作戦。
11. 判断力	的確な判断、冷静な判断、すばやい判断。
12. 協調性	チームワーク、団結心、協調、励まし。

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」

p. 112 (株) トーヨーフィジカル出版部 2009

表3. 心理的競技能力総合得点の判定表

判定 評価	1 (かなり低い)	2 (やや低い)	3 (もうすこし)	4 (やや優れている)	5 (非常に優れている)
男子	141以下	142~164	165~186	187~209	210以上
女子	131以下	132~154	155~178	179~202	203以上

出所：徳永幹雄：「T.T式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」

p. 112 (株) トーヨーフィジカル出版部 2009

その理由として、『優秀な選手、試合中の心理状態が優れている選手、実力発揮度が高い選手は、総合得点が高い』という徳永⁶⁾の指摘の通り、今回のアルティメット選手161名中、男子37名、女子20名、合計57名(35%)が、2012年に開催された世界大会の日本代表選手(男子・女子・ミックスの3部門)であること、また、23歳以下日本代表(男子・女子・ミックスの3部門)68名中54名(80%)が大学生ではあるものの、所属チームの主力選手であることから競技水準が高い選手達であることが考えられる。

次に、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子得点における性差について検討した。心理的競技能力の5因子得点を男女別に集計したものが表4.である。

精神の安定・集中、自信、作戦能力の3因子において、男子が女子に比べ有意に高いことが明らかになった。一方、協調性においては、女子が男子に比べ有意に高いことも明らかになった。

徳永ら⁷⁾は、DIPCA.3の各因子に関して、『性差については、内容的には、男子は作戦能力、自信、競技意欲、で優れ、女子は自己実現意欲や協調性で優れ、精神の安

定・集中では顕著な差は認められない。』と述べている。

また、バイアスロン競技選手を対象とした佐川ら⁸⁾の先行研究においても、『精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性において、男子が女子よりも、有意に高いことが認められている。』さらに、小笠原ら⁹⁾も、『自信、作戦能力の因子については男子が、協調性の因子については女子が有意に高い』ことを報告している。

今回のアルティメット選手は、先行研究とほぼ同様な因子得点の傾向を示した。このことから、アルティメット選手の心理的競技能力が他の競技スポーツとほぼ同様の特徴を示し、また、その得点も同程度であると推測できよう。

最後に心理的競技能力12尺度得点における性差について検討した。心理的競技能力の12尺度得点を男女別に集計したものが表5.である。また図1.は男女の尺度別のプロフィールである。

先ず、男子における12尺度の得点順位が高い順は、1. 闘争心、2. 協調性、3. 集中力、4. 自己実現意欲、5. 自己コントロール能力である。一方、女子では、1. 協調性、2. 闘争心、3. 自己実現意欲、4. 忍耐力、5. 集中力の各尺度であった。

表4. アルティメット選手の5因子得点

5因子	男子(87名)		女子(74名)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
競技意欲	68.38	20.90	64.46	16.74	0.31
精神の安定・集中	47.64	7.89	44.59	8.84	2.29*
自信	28.09	5.93	25.04	6.34	3.13**
作戦能力	26.05	5.78	24.34	5.12	1.99**
協調性	16.77	2.60	18.30	2.00	-4.20***

* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

表5. アルティメット選手の心理的競技能力12尺度における得点の平均値と標準偏差

DIPCA.3	男子(87名)		女子(74名)		t値	p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
総合得点	184.06	23.26	177.85	18.26	1.90	0.060
忍耐力	15.43	2.92	16.05	1.90	-1.64	0.103
闘争心	17.98	2.52	17.50	2.53	1.19	0.234
自己実現意欲	16.36	2.78	16.34	2.20	0.05	0.963
勝利意欲	15.75	2.64	15.69	2.47	0.14	0.886
自己コントロール能力	16.09	2.88	14.81	3.00	2.75**	0.007 **
リラックス能力	15.07	3.32	14.00	3.83	1.88	0.063
集中力	16.48	2.51	15.78	2.76	1.67	0.097
自信	14.33	3.01	12.64	3.43	3.31**	0.001 **
決断力	13.76	3.23	12.41	3.16	2.68**	0.008 **
予測力	12.91	2.99	12.58	2.65	0.73	0.464
判断力	13.14	3.02	11.76	2.85	2.99**	0.003 **
協調性	16.77	2.60	18.30	2.00	-4.20***	0.000 ***

** : p < 0.01 *** : p < 0.001

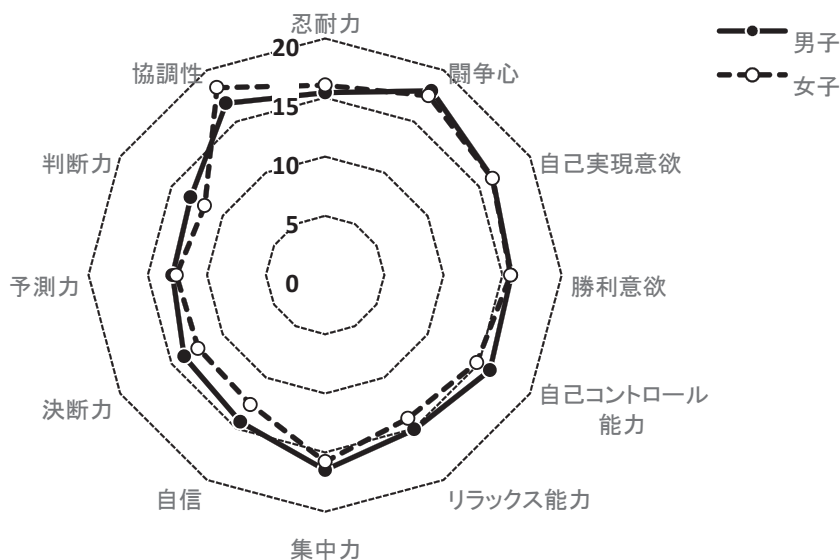


図1. アルティメット選手の尺度別プロフィール

アルティメットのゲームでは、男女を問わず、高いファイティングスピリットと積極的なプレーが要求されるため、戦う姿勢を全面に押し出す必要がある。また、当然、他の競技スポーツ同様、チーム内でのコミュニケーションや協調も重要なスキルとなる。従って、男女共に、上位の尺度であった、闘争心や協調性等は、アルティメット選手の心理的特徴である可能性を示唆していると考えられる。

また、徳永¹⁰⁾は、プロフィール表において『線が外側に広がり、高得点になるほど望ましいといえます。また、線のデコボコ（凸凹）が少ないほどバランスがとれています。すなわち、円が外側に大きく、デコボコが少ないほど望ましい心理状態』であると述べている。図1.のプロフィール表でも闘争心と協調性が男女共に外側に近く、アルティメット選手の特徴が示唆されていると思われる。

さて、今回のアルティメット選手における12尺度については、5尺度について性差がみられたが、自己コントロール能力・自信・決断力・判断力の4尺度においては、男子が女子に比べ、有意に高い値を示した。従って、男子は女子に比べ、緊張を強いられる場面であっても安定したパフォーマンスを発揮し、ゲームを的確にコントロール出来る事が推測される。また、協調性においても顕著な差が認められ、上述した4尺度とは反対に、女子が男子に比べ、有意に高い値を示した。このことから、女子選手は、男子選手に比べ、協力的で、相互に尊重し合う事が推測される。

徳永ら¹¹⁾は、一般的に『男子は、判断力、予測力、自信、決断力、忍耐力、闘争心、勝利意欲で優れ、女子

は、自己実現意欲や協調性で優れ、集中力、自己コントロール能力、リラックス能力では顕著な差は認められない』と報告をしている。さらに、徳永¹²⁾は、『近年のデータから、男子は判断力、自信、予測力、決断力、闘争心、自己コントロール能力で有意に高い値を示した。ただ、女子は自己実現で有意に高く、協調性でやや高い傾向がみられた。そして、勝利意欲や集中力には顕著な差は認められなかった。』とも述べている。

また、前述したアテネオリンピック出場選手における性差の比較では、『男子は、闘争心、自信、決断力、予測力、判断力の6尺度について有意に高く、一方、女子選手は、協調性においてやや高い得点を示している。』¹³⁾というものであった。

さらに、本間ら¹⁴⁾は、女子種目であるシンクロナイズドスイミングの日本代表選手の協調性が顕著に高いことを報告している。

今回のアルティメット選手では、男子選手において、先行研究とほぼ同様な傾向がみられた。また、協調性においては、男女に顕著な差が認められ、女子が男子に比べ、有意に高い値を示した。『協調性については、外国の研究には見られず、わが国スポーツ選手に求められる特徴ある内容と考えられる』という徳永¹⁵⁾の報告もあることから、女子選手における協調性の尺度が男子選手に比べ高いことは、アテネオリンピックの女子選手およびシンクロナイズドスイミング選手も協調性が高かったことから、アルティメット女子選手の特徴的なスキルではなく、我国女子スポーツ選手の全般的な特徴ではないかと思われる。

まとめ

日本のトップレベルアルティメット選手、男子 87 名、女子 74 名について DIPCA.3 を実施し、心理的競技能力の性差について分析したところ、以下の結果が明らかになった。

- 1) アルティメット選手の DIPCA.3 における総合得点からみた心理的競技能力の性差は、日本の他種目トップレベル選手における先行研究の結果とほぼ一致し、その心理的競技能力は他種目とほぼ同等のレベルであった。
- 2) DIPCA.3 の 5 因子得点では、他種目の先行研究結果と同様に、男子では精神の安定・集中、自信、作戦能力が女子より高く、女子では協調性が男子より高かった。また、それらの因子得点のレベルは、他種目とほぼ同等のレベルであった。
- 3) DIPCA.3 の 12 尺度得点では、5 尺度について性差が見られ、自己コントロール能力、自信、決断力、判断力において男子が女子より高い値を示し、女子は、協調性において男子より高い値を示した。また、12 尺度のプロフィールから見て、アルティメット選手は闘争心と協調性が高く、特徴的であった。

アルティメットにおいては、大学入学後に競技活動を開始する選手がほとんどである。野球やサッカーなどのメジャースポーツ選手との間には、経験年数において大きな差異があることが特徴的である。

徳永¹⁶⁾ は DIPCA.3 には、『個人差があることを明らかにしており、経験年数、大会参加数、優勝経験等により、DIPCA.3 の値が異なる』事を示唆している。

そこで、今後の課題として、経験年数や国際大会出場の有無などが、DIPCA.3 の値にどのように影響を及ぼすのかを検討してゆきたい。

謝辞

本研究に際しては、日本アルティメット協会の方々から格別な配慮を賜りました。ここに氏名を記して深甚の感謝を捧げる次第です。

日本アルティメット協会会長 本田 雅一氏
同チーフプロデューサー 大井 誠氏
同プロデューサー 梅原 貴正氏

注

1) アルティメットのゲームの進め方

ゲーム開始前に、オフェンスとディフェンスを決め、各々のエンドゾーン内に横一列に並び、ディフェンスチームからのスローオフでゲーム開始となります。スローオフ前には、どちらのチームともゴールラインより前には出られません。両チームとも相手のエンドゾーンがゴールとなり、オフェンスチームは、味方同士のディスクのパスで攻撃を展開していきます。その際、ディスクを持っているプレーヤーは歩くことができません。ディスクを保持したプレーヤーが軸足を移動したり、歩いたりするとトラベリングという反則になります。パスしたディスクが地面に落ちたり、アウト・オブ・バウンズとなった場合(ラインから出た場合)、または、ディフェンスチームのプレーヤーにインターセプト、あるいは、パスカットされる、ストーリングアウトになる(マーカーはスローワーズの 3m 以内の位置についた時点で「ストーリング」とコールし、1 秒間隔で 10 (テン) カウントを始める。スローワーズは 10 の声が発せられる前にディスクを投げないとストーリングアウトとなる。)等がおきた場合などは、ターンオーバー (T.O.) となり、その場で攻撃権は、相手のチームに移ります。プレー中にディフェンスへの走路妨害が起こった場合は、ピックという反則になります。1 点入るごとにコートチェンジを行い、前のプレーで得点したチームがディフェンスとなり、スローオフを行います。

(<http://www.japanultimate.jp/> 日本アルティメット協会より引用)

2) フライングディスク

フライングディスクとはプラスチック製の円盤状のディスクのことで、一般にはfrisbee (Frisbee) という名称(アメリカ・ワムオー社製の登録商標)で呼ばれることもあります。フライングディスクの起源は、1940 年代、アメリカのアイビーリーグの名門校であるエール大学の学生たちが、キャンパス近くの「frisbee・ベーカー」のパイ皿を投げ合ったのが始まりといわれています。その光景に興味を持った建築検査員のフレッド・モリソン氏が 1948 年、金属製のディスクを試作し、その後の改良で現在のプラスチック製のディスクが誕生しました。いまでは、材質に改良が重ねられフライングディスクの飛行性能は、最長飛距離「255m」、最高時速「時速 140km」、最長滞空時間「16.72 秒」ときわめて優れたものとなっています。

(<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用)

一般社団法人 日本フライングディスク協会によれば、『本協会が加盟している世界フライングディスク連盟 (WFDF) の加盟・準加盟国は 56 カ国で、全世界における愛好者人口は約 6,000 万人、競技者人口は 700 万人に達するといわれており、1989 年には、IOC が後援する非オリンピック種目の世界大会「ワールドゲームス」のエキジビション種目となりました。そして、2001 年 8 月に秋田で開催された第 6 回ワールドゲームスからは正式競技に採用されました。1995 年には、国際スポーツ 90 団体の連合体である GAISF* の正会員にも認められており、2013 年には WFDF が IOC (国際オリンピック委員会) に準公認団体として認められ、オリンピック種目化への第一歩を踏み始めました。その他、フライングディスクは、文部科学省をはじめとする様々な組織が主催する生涯スポーツ講習会に採用されており、1999・2000・2002・2003 年には NHK 教育テレビの番組「テレビ・スポーツ教室」にも取り上げられ、スポーツとしての認識が高まってきました。(財) 笹川スポーツ財団の「スポーツライフ・データ調査」によれば、フライングディスクの愛好者人口は約 150 万人に達しており、150 校を超える中学・高校・大学などの授業にも採用されています。また、1996 年からは全日本アルティメット選手権大会が文部科学大臣杯をいただく大会に認められました。』

(<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用)

* GAISF : General Association of International Sports Federation

国際スポーツ連盟機構。オリンピック種目以外の国際大会を主管する。

フライングディスク競技には、公認されている 10 種目が存在する。

詳細については、<http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会の HP を参照されたい。

3) アルティメット日本代表の戦績

本年 7 月イタリア・レッコで開催された世界ジュニア (U-19) アルティメット選手権の戦績は、オープン部門 (性別不問: 男子) が 9 位、ウィメン部門 (女子のみ) が 7 位であった。

また、同年 8 月同じくイタリア・レッコで開催された世界アルティメットクラブ選手権のオープン部門に出場した、文化シャッターバズバレッツ (平成 26 年度全日本アルティメット選手権大会優勝) は 7 位、ノマディッ

クトライブ (同 3 位) は 11 位、ロキートス (同 2 位) は 33 位。ウィメン部門に出場した壱 (同優勝) は 6 位、ハック (同 2 位) は 8 位、マッド (同 3 位) は 17 位であった。

以下に、過去の日本代表の戦績を示す。

年	開催国	オープン	ウイメン	ミックス	オープン マスターズ	ウイメン マスターズ	U-19 オープン	U-19 ウイメン
2013	ワールドゲームズ ／コロンビア	-	-	5位	-	-	-	-
2013	世界U-23アルティメット選手権大会 ／カナダ	6位	準優勝	3位	-	-	-	-
2012	世界ジュニア(U-19)アルティメット選手権大会 ／アイルランド	-	-	-	-	-	9位	8位
2012	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／日本(堺)	5位	優勝	3位	3位	3位	-	-
2011	アジア・オセアニア アルティメット選手権大会 ／台湾	優勝	-	優勝	-	-	-	-
2011	世界ビーチアルティメット選手権大会 ／イタリア	-	9位	-	-	-	-	-
2010	世界ジュニア(U-19)アルティメット選手権大会 ／ドイツ	-	-	-	-	-	13位	7位
2010	世界U-23アルティメット選手権大会 ／イタリア	準優勝	準優勝	-	-	-	-	-
2010	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／チェコ	3位	準優勝	16位	9位	-	-	-
2009	アジア・オセアニア アルティメットクラブチーム選手権大会 ／フィリピン	優勝	-	-	-	-	-	-
2009	ワールドゲームズ ／台湾	-	-	準優勝	-	-	-	-
2008	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／カナダ	3位	準優勝	準優勝	6位	-	8位	優勝
2007	アジア・オセアニア アルティメット選手権大会 ／台湾	-	-	優勝	-	-	-	-
2006	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／オーストラリア	優勝	優勝	18位	優勝	-	-	-
2005	ワールドゲームズ ／ドイツ	-	-	4位	-	-	-	-
2004	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／フィンランド	5位	4位	8位	6位	-	10位	4位
2002	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／アメリカ	10位	8位	11位	5位	-	-	-
2001	ワールドゲームズ ／日本(秋田)	-	-	3位	-	-	-	-
2000	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／ドイツ	8位	準優勝	7位	8位	-	7位	-
1999	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／スコットランド	16位	3位	準優勝	-	-	-	-
1998	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／アメリカ	準優勝	準優勝	-	4位	-	-	-
1997	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／カナダ	11位	12位	-	15位	-	-	-
1996	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／スウェーデン	4位	3位	-	8位	-	-	-
1995	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／イギリス	17位	5位	-	-	-	-	-
1994	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／イギリス	5位	6位	-	7位	-	-	-
1993	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／アメリカ	27位	16位	-	-	-	-	-
1992	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／日本(宇都宮)	3位	優勝	-	3位	-	2位	-
1991	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／カナダ	29位	13位	-	-	-	-	-
1990	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／ノルウェー	9位	9位	-	-	-	-	-
1989	世界アルティメットクラブチーム選手権大会 ／ドイツ	14位	7位	-	-	-	-	-
1988	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／ベルギー	9位	10位	-	-	-	-	-
1986	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／イギリス	9位	13位	-	-	-	-	-
1984	世界アルティメット&ガッツ選手権大会 ／スイス	8位	-	-	-	-	-	-

(注1) 複数チーム派遣の場合は、最高位のみを記載

(注2) 派遣チーム無し、又は開催部門無しの場合は「-」と記載

出所：http://www.japanultimate.jp/ 日本アルティメット協会

文 献

グ～心理的競技能力の診断と強化～」pp.51～55 大修館書店（2010）

- 1) <http://www.jfda.or.jp> 一般社団法人 日本フライングディスク協会より引用
- 2) 徳永幹雄：「T.T 式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」pp.8～15（株）トーヨーフィジカル出版部（2009）
- 3) 徳永幹雄：「スポーツ選手に対する心理的競技能力評価の尺度の開発とシステム化」pp.91～102 健康科学 23（2001）
- 4) 村上貴聡・今井恭子・菅生貴之・立谷泰久・石井源信：「アテネ五輪代表選手を対象としたメンタルチェックに関する報告」日本スポーツ心理学会第 31 回大会発表抄録集 pp.31～32（2004）
- 5) 立谷康久・今井恭子・山崎史恵・菅生貴之・平木貴子・平田大輔・石井源信・松尾彰文：「ソルトレークシティ及びトリノ冬季オリンピック代表選手の心理的競技能力」Japanese Journal of Elite Sports Support vol. 1 pp.13～20 国立スポーツ科学センター（2008）
- 6) 徳永幹雄：「T.T 式メンタルトレーニングの進め方～心理的競技能力診断検査の手引き～」p.14（株）トーヨーフィジカル出版部（2009）
- 7) 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東 健二・稲福 勉・斉藤 孝：「スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差、競技レベル差、種目差」pp.109～120 健康科学 22（2000）
- 8) 佐川正人・佐々木茂喜・小林 規・神林 勲：「バイアスロン競技選手の心理的競技能力の特徴」pp.1～8 冬季スポーツ研究 1 巻 1 号 北海道教育大学冬季スポーツ教育研究センター（1997）
- 9) 小笠原義文・浅沼道成：「高校一流選手の心理的競技特性に関する事例研究～岩手県ミニ国体出場選手を対象に～」pp.173～183 岩手大学人文社会科学研究紀要 No.58（1996）
- 10) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニング～心理的競技能力の診断と強化～」p.28 大修館書店（2010）
- 11) 徳永ら：「前掲書」
- 12) 徳永幹雄：「スポーツ選手に対する心理的競技能力評価の尺度の開発とシステム化」pp.91～102 健康科学 23（2001）
- 13) 村上ら：「前掲書」
- 14) 本間三和子：「シンクロナイズドスイミング日本代表選手の心理的競技能力」pp.1～9 12 巻 1 号（2009）
- 15) 徳永幹雄：「前掲書」
- 16) 徳永幹雄：「ベストプレイへのメンタルトレーニン

